

巻頭言

大学教育と文化としてのからだ

新村 洋史

(中京女子大学)

大学における保健体育は、一般教育の理念と関連させて位置づけられてきた。今日、その理念、目標、内容・方法が根源的、全一的に問われている。単に一般教育の観点からだけでなく、学生の生活福祉や健康管理、自治的文化活動の保障、大学教育という観点から総合的にその可能性を追求しなければならない。その意味では、保健体育の教育を通じて現代社会とその学生の発達に責任をおえる大学像をきざることが求められている。

周知のとおり七〇年代半ばから、子ども・青年の「からだのおかしさ」が実感と大量調査にもとづいて指摘されてきた。「学力」競争の激化のなかで、人格の未発達やゆがみと同時に、直立二足歩行をすることから発達した人間的体力の退化がいわれ、人間という種の危機が訴えられた。それは、教養や生きる力を身体的能力や身体的発達という観点から探求しようとする自覚のあらわれである。すでに、一九六〇年代半ば、勝田守一(教育

学者)は、「言語能力」とともに「運動能力」が「認識の能力」をはじめ諸他の人間的能力の全体を支えるものと洞察していた。

一九七〇年代半ばには、「学力」競争や受験体制という面だけからは、青年にすくう三無主義とよばれる学習意欲や生きる力の衰退は説明しきれないとする子ども・青年の状況がひろがった。ここではこの衰退の根源が子ども・青年をめぐる自然・社会・文化の全体状況が身体の未発達としてあらわれているとし、「文化としてのからだ」の未発達を克服することが不可欠の課題であるとされた。『教育への構図』(竹内常一著、一九七六年)は、このような観点から青年の人格発達の歪みを分析し、学校づくりを構想したものである。

「文化としてのからだ」とは、たとえば、自然にはたらきかけることのできる「巧みな手」、段取りをたてて仕事をてきぱきとこなしていくことのできる労働能

力、仲間とひびきあつて遊び運動し自己解放や自己表現のできるしなやかなからだ、仲間とともに喜んだり怒ったりして社会的正義を追求できる「社会的本能」などである。それは単に運動文化の能力だけでなく、身体感覚や五感といわれるものの発達、総じて人間のなかの自然とその発達を志向する。人間は皮膚、手、身体で大地にふれ、世界（人間存在、自然、社会、文化）に感応し認識する。このような意味での「文化としてのからだ」の未発達が自己中心性、社会への無関心、主体性や目的意識の弱さという人格の未発達と結びついている。

大学生もまた生涯発達の途上にある。身体は私事性においてばかりでなく、公共性、すなわち、人類文化の継承と創造、主権者形成という観点からとらえたい。これを身につけることが教養教育、学問的精神、大学教育にふさわしい自己確立や社会的道徳の形成に寄与することになろう。かつて、かのJ・J・ルソーは人

間教育の原点に食や身体の教育、総じて健康教育を位置づけた。「自己保存」の能力、自己の身体の主人公としての能力を陶冶しえない人間は新しい共和国の主人公¹¹主権者になりえないとみていたからである。J・J・ルソーにとつて健康教育は同時に政治教育（社会形成の担い手を育てる自治的能力や政治的教養の陶冶）につながるものとして構想されていたのである。今日においても体育をこのように位置づけている人々は少なくない。

『体育と人格形成』（一九八〇年）を著わしている城丸章夫もそのひとりである。ひるがえつて、今日の学生をみればどうだろう。身体的発達と自治的社会的能力との発達はいちじるしく損なわれているといつて過言ではない。身体の虚弱化、身体活動への意欲の喪失、身体意識や現実感覚、生活実感などの希薄化、コミュニケーションや共同する力、人間関係をきり結んでいく社会的能力の未熟、能动性・主体性や現実・環境に変革的に働き

かけていく力の衰退などが目立つ。これらを、「文化としてのからだ」の未発達の問題として検討してみる必要がある。これらをふまえて考えると、大学もまた「自主的精神に満ちた心身ともに健康な国民の育成」（教育基本法第一条）をめざして保健体育教育を充実していくことがとめられる。その教育活動はまず、学生の身体的発育・発達を保障し、健康にたいする自己管理能力を育てる必要がある。第二に、運動文化の習熟をとおして人間と文化に対する教養を獲得させた。第三に、身体（活動）と文化や科学を統一的に理解する能力、学問的精神をやしないたい。第四に、創造的な人間関係やコミュニケーションをつくりだしていくことへの関心、意欲、意志や勇氣、理性的な自己・他者認識を育てる場とするなどである。大学教育としての保健体育の可能性はこのように大きい。